

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2019. 5



令和元年5月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第5号

No.732

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇一九年五月号(通卷七三二号)

◇今月の二十首詠……五十年

## 作品

松永智子・牧 雄彦他 4

A 牧野君代他 20

B 茂木静子他 52

C 間野春美他 66

A 窪嶋義文他 80

小野雅子 2

## オリーブ集

有馬さと子・阿部 律他 42

◇今月の二人

村石けさ子・村上かず子 16

香川進の生きものの歌 7

田土成彦 15

■香川進・没後二十年を経て

忘れ得ぬ香川進 1 〈本家・分家〉 椎名恒治 38

香川進師つれづれ 1 〈入門〉 佐久間晟 19

香川進からの遺産―口語自由律から出発して 久我田鶴子 19

私と短歌との出会い(201)

篠原日出子 19

■遊覧寄港〈『森林珈琲』もしくは〉

国原喜美子 48

## 歌壇月旦

筑紫歌壇賞

榎垣美保子 71

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 50

## 三月号作品批評

A……………榎垣美保子・石塚貴美恵 72

浜脇景子・真庭郁子

B……………久土目薫・荒川信明

C……………中村博子

オリーブ集……奥田陽子

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

最近の歌誌より

(編集部) 100

支社・グループ揭示板

(福島支社)

横田敏子 99

(天平グループ)

坂上直美

久我編集長を迎えて 渡霜グループ二月歌会記

宮本靖彦 98

送風塔

山合邦子 49

第一歌集の頃

赤坂たけ子 65

第67回地中海全国大会(新大阪大会)のご案内

102

クリップ……………101 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tzanki Xyga

## 五十年

小野 雅子

ポインセチア花あかあかと暮れの町いろどる頃に生を享けにし  
 学童疎開の児童でありし日のいたみ『黄金記憶』として残りゆく

丸つこい三日月をよく描いてゐた木造校舎の中学時代

高井戸に八幡山に住まひして抽選で当たる夏見台団地

芝生まだ根づきてをらず土ほこりサッシを越えて床を汚しぬ

ホームの一部に屋根あるのみの鄙びたる駅でありしよ船橋駅は

真夜中に電話の鳴りて事故に遭へる夫と知りたり連休の明け

病む母にその死をいかに伝ふるか悩みしと今も嫂の言ふ

昭和十一年生まれ。  
 昭和四十六年入会。羊ケループ所属。  
 歌集「花筐」「白梅」他、  
 エッセイ集に「小野茂樹片片」がある。

木の影の黒く並べる間より朱色の空を陽の昇りくる

一人ゆく「芸大メサイア」ホール出で夜の匂ひと寒さの中を  
生きてあらば今年もきつと行つたはず黒い表紙の総譜スコアが遺る

この窓に見ゆる景色も変りたり喫茶店消え自転車屋なく  
帰りきて船橋駅に降りたたば驚くべしといつでも思ふ

ビル繋ぐペDESTリアンデッキありその下をバスの着きて出でゆく

いのちあらば歌集なん冊あつたらう生まれこざりし歌を悼むも

どれほどに誉めらるるとも過去形でしか語られぬ逝きにし人は

小野姓にあらねど唯一の孫なれば将棋を指して喜びしものを

タイピンの真珠を指輪に作りかへいまわが指をときをり飾る

団地建ち五十年とて記念行事の写真を綴るカレンダー成る

香川進の筆に書かれし「羊雲」の文字の深きを洗ふ命日

# 作品 A

松 永 智 子 腕 嵐

たたかひに死にゆきしもの声としもよみがへりくるこの夜半の月  
 搭乗のかの日の若者ふりむかぬままなりことば残さぬままなり  
 ためらひをみせぬ若さをいさきよさとたたへしを哭けいのち戻らぬ  
 「彗星」の配電盤に対き合ひひたすらなりき配線したりき  
 音の絶えたたなはりくるきさらぎの闇なりひとのことばみえくる  
 ことばひとつ石ひとつ置き逝きにけるひとありとほし雨のきさらぎ  
 その際になに捨つるらむつつむらむすでになにも持てぬこの腕

牧 雄 彦 棒 だら 大

病室の窓より見ゆる東山くれなるに黄に色を散らして  
 為す術もなく見守れり静かなる病室に臥す姉のあきとふ  
 応へてきぬ姉に向かひて若き医師優しく頬を撫でてものいふ  
 十二月四日午後四時姉は逝く窓より京の夕暮るる見つ  
 姉の逝きし年は終はりぬ庭に立ち遠くの除夜の鐘の音を聞く  
 姉の作りし「棒だら」は京の冬の味いまは過ぎし日の思ひ出となる  
 残照の冬空映す川の面をかすかに伝ひ来亡き人のこゑ

松 浦 禎 子 トスカーナの月 羊

ガン告知受けたるわれに驚きてイタリーの旅へさそいし息は  
 われと子のふるさと秋田は遠々にいまトスカーナの野をすぎて行く  
 いま過ぎてゆくトスカーナその彼方黄金波うつふるさとおもう  
 唐黍のひげまでもみゆトスカーナのみどり波うつ目路のはてまで  
 トスカーナの田園めぐり来し夜更けレンガの屋根に浮かぶ満月  
 須賀敦子終油うけたる如月にアスフォデロの花野ゆきしか  
 汝が夫口移しに読みかしたるイタリーの詩を愛せし敦子

三 浦 好 博 雨 戸 銚

雨戸閉め雨戸を開けて雨戸閉め雨戸を開けてああ五十年  
 嗅覚が駄目になりしがせひもなし無限耳鼻舌身意無色声香味触法  
 チゴイネルワイゼン聞きつつ歌集読む岩田正よお許したまへ  
 公園の北向き倉庫に立たされて草刈り機は冬のうたを唄はむ  
 如月のスーパームーンを独り占め厠に立てるこの小夜中に  
 何処より来しひとなるか海に向く岬のベンチに長く居りけり  
 死に遅れしバッタが動く大寒を二日過ぎたる園に吾のこと

宮本靖彦 大阪花博公園 ・凌

茂木 斌 小鳥の拍手 ・埼

春の野は未だ開けざるに名のみ知る地図を眺めて下見のたのし  
各国の遺構残して三十年花博丘陵大公園に

花博の名物風車丘上に時を止めてゆるゆる回る

花博の跡地に巢食ふ青鷺の静止のポーズ目だけがうごく  
各国の花博遺構それぞれに仏国キュビット石台にをどる  
しつこさと語るスタッフ はやぶさ2龍宮着地の原動力を  
はやぶさ2龍宮着地の喜びにいや増す世界の宇宙競争

三好聖三 交易国家 ・伊

もとむらしげと 嫁ぐ娘 ・そ

三原山天城連山ともどもに雪をかぶりていると聞きたり  
指先がはつか割れいしこともまた弊衣破帽も畑には合う  
沖繩へ古琉球へその前の人が渡りしころの息吹へ

軍用機ふたつが南へ飛んでゆくまるで日課のようにこのごろ

琉球 交易国家という文字に惹かれて一冊買って戻りぬ

梅の香の匂うあさあけ道の辺の霜踏みしめてわたる駅まで  
あかあかと月は東にのぼりくる思いのほかのおおきさにして

御代田澄江 海食崖 ・茨

八乙女由朗 誕生日 ・柴

崖荒々這ひ蹲ひ見し東尋坊夫傍らに居りし日なりき

一度見せたりし連れゆきたしと金沢兼六園景麗はしも筆柱偲ばゆ

音立てず粥は食むべし沢庵も永平寺廊きしりと軋む

ドラセナマッサンキアナ幸福の木枯れし葉取り去り滑しくなりぬ

夫亡くも祝ひ忘るな結婚記念日思ひ出だせしもの何ならむ

あさり飯ケーキ チーズバナナみかん供ふるに君やいつこに在す  
金色に照る西の窓いつまでも開き置きたし閉めねばならぬ

口遊む演歌ひと節山道に小鳥がビビイ拍手か鳴けり  
奥多野に車走らす冬さくらの平成最後の花を見るべく

旅のひと若山牧水に先がゐるた牧之の父は牧水と号す

山ばかりに古道を持つを熊野といひ野ばかりの地を熊谷と呼ぶ  
女子ふたり分岐に棒たて占ふも手前に倒れ「きやあ、戻れだよ」  
おみくじの吉引き当つも喜べずさらに大吉、大吉ありて  
高草木なりし姓あり一文字に組立てみれば藁となりたり

早春の光ふる日に嫁ぎゆく子は木の芽ぐむ秋に生まれぬ  
開きたる扉の向こうに多くの目見つむる中を子と歩きゆく  
腕を組み歩きつつゆく正面に娘を待てる彼を見すえて  
握手する手によりしくと言ひ添えて今渡したり子の人生を

おさなごが指輪をもちて怖々とガラスの床を踏みしめて来ぬ  
手を取られ二人の兄といでゆけり三歳の日の写真のごとく  
親の知らぬ世界豊くありにけむ友の言葉にみえるわが子は

平成末の八十八歳誕生日腰痛にして電気掛けおり

十歳は若く見ゆると煽てられその気になれどその身及ばず

鏡をば見るたび顔は縮まりてクシャおじさんになりつつあるよ

老いすすめば昔の言葉いでて来ておのれも嬉し妻も喜ぶ

老い二人が家に籠もれる毎日は当直勤務をなしている感懐

九十路をば越ゆるは難渋多くして布団が重い風も重圧  
暖冬を越え得て侘しわが里にしろき雪原見ぬまま過ぎて

## 山下 雅子

秋明菊

・習

茜さす東の光おもむろに陸月の今日をひらきつつあり  
おしるしを置きて飛びしや朝の日のとどくポストに白く光りぬ  
ひさびさにしっとり降り降る雨を見る庭の草木のよるこびおらん  
咲き揃う秋明菊に足止まりつつがなからん主が浮かぶ  
十六夜の月の光に家路ゆくひっそりともる門灯見え来  
目の前の駅が遠のく三本の足となりしにこの算合わぬ  
味のよきいなごよ稲田に捕りしあのひもじさを呼ぶ生々しくも

## 横田 敏子

三月の記憶

・福

八年の長き時間乗り越えて鮮やかに顕ちくる三月の記憶  
猛りくる波に次々攫われし人、家、車、生活の綵て  
原子炉の爆せて立入り禁止なる被災地の桜間もなく咲かん  
原子炉に溶けしテプリの撤去さえ見通し付かず九年目に入る  
夕さればふいに込みあぐる思いあり ひと日を荒れし風まだ止まず  
深く逝きてしまひし樹木希林「一切なりゆき」さざりと生きて  
わたくしの影踏みしまま動かざる人あり 少し横にずれゆく

## 吉 永 惟 昭

水温む

・熊

水温む街の小川や指の先 甲は冷たき風撫せゆくも  
暖かき光浴びせし陽に向かいアニメＴシャツ裏返して干す  
暫くを開き放てば水道も温みを感じず食器洗う手  
湯上がりは裸の肩にバスタオル暖房入れず安らぐソファ  
認知症すすみゆく妻に残りいる嫉妬心よし水温むなり  
雛飾りしことも遙かや被爆妻甘酒を飲むあたたためもせで  
菱餅の喉詰まり恐れ雛笹桃の節句を妻としたしむ

## 朝井 恭子

山茶花

・森

山茶花の垣根の前なる立ち話聞き耳立てて春風の過ぐ  
さざんかの終の一夜の蕊ぬらし春の雨降る音もなく降る  
しとしとと昨夜より続く細き雨鉢植えの花優しく包む  
ヴェランダを彩りて咲くゼラニウム「天竺葵」の別名床し  
窓の辺を飾りて赤き狸々木季過ぎゆくも尚鮮らけし  
そそくさと息は掃りぬバースデー・ケーキの箱を我に渡して  
息よりのバースデー・ケーキの一切れを夫にも供え共に祝いぬ

## 磯田 ひさ子

大往生

・森

屋根瓦落ちし映像 大型の台風過ぎたる朝のメールに  
とりこはす話にしばしたちろきぬ誰も住まねば止めるすべなし  
物分かりのよき姉であるために実家の解体をすんなりと容る  
形より心が大事と自らに言ひ聞かせつつゆふべは寒し  
過去までも消ゆる心地す勉強に励みし二階の部屋もろともに  
解体の決まりたる家に弟は長く礼して門札ははずす  
大往生遂げて天晴れ跡かたもなく消え去りしわが生れし家

## 市原 志郎

春來たる

・萬

千両の赤き実のある我が家の玄関にも来し春を楽しむ  
春一番ならねど風の吹く朝はうつつとして我は寝ており  
我が誕生日を祝うと孫ら買って来し花はゆらゆら揺れる夕べ  
旅の本見るのみにして楽しみぬ妻には行かせてやりたく思う  
預かりている白き犬ようやくに我に馴染みて寄りて来るなり  
足もとにクロッカス咲き始めた我が家の庭にも春は来ていた  
リハビリに出で来たるこの街角に梅咲き春の早や聞けにけり



## 市原やよひ

桃の小枝

・萬

## 奥田陽子

冬の日

・羊

芽ばかりの桃の小枝を手折り来て手作り雛の前に飾れり  
 青空と雨と交互の日が続く春の序章と語いており  
 スローモーション画面のように指揮棒の止まりたるのち拍手が起ころ  
 日曜が日曜である証にて息子家族が全員揃う  
 今日元氣明日は如何にと思ふとき時計の針は明日へと動く  
 パン肩を漸く見つけてくれたのかすずめ一家が全員で来た  
 四姉妹の電話の話結局は去年に逝きたる弟に帰す

## 大浪美雪

雪虫

・森

## 小野雅子

鴉

・羊

雪虫と手を伸ばせるもカMEMシ目ワタアプラムシ科と聞き身を引く  
 雪雲の下なる屋並墨色に刷かれたる如く闇に沈める  
 昨夜遅く降りたるものか舗装路に凍りてありぬ六花の形  
 雪のけて掘りたるという大根の緑濃き葉もみずみずとして  
 雪の間にさみどり色をのぞかせるほどきかけたる露のとう三つ  
 地ひびきを立てて屋根より落つる雪一日をかけて東より西へ  
 屋根よりの雪に注意と教えくれし青年と巡りし札幌とおし

## 奥田清和

はやぶさ

・大

## 菊岡栄子

節分の頃

・漣

人か神かははやぶさ2号大宇宙さぐるもいくさのでたてか知らず  
 惑星をめざしかけゆく「はやぶさ」は夢のまたゆめ神かあらずか  
 「はやぶさ」は神にあらずや異次元の石もて帰る謎解くらしも  
 地球人大宇宙駆けせめぎあふ魑魅魍魎の地獄曼荼羅  
 年間の古典教材をしぼりあげ源氏・長恨歌説きし日の記憶  
 よき人と自由気ままに指導せし源氏・長恨歌今に悔いあらず  
 つばくろの廊下に来れば子つばめはしきりに口を開けるを見つ

智恵つける幼な児のさま言いし声遠き電話の声よみがえる  
 すこしずつ葉を落とす樹をみあげいる身籠りし子の背あたたかく  
 子の発たん朝きびしき冷え至り北陸信濃雪降りしきる  
 豪雪の信濃大町二階屋の窓まで積める雪と聞きいし  
 ランニングの少年ら声揃えゆく冬空の青ひろがれる下  
 裸木を突きぬけて来る歓声にすばやく動く少年の影  
 駆け来るは幼きわれか木隠れにわずかに見えて遠ざかりたる

折りたたみ傘のごとくに羽たたみ低きフェンスに鴉のとまる  
 騒ぎ啼きたちまちにみな遠ざかるなかに気がついたのか鴉は  
 自分への褒美にと買ふうす紅の枝垂れ桜を描ける急須  
 褒美など長くもらひしことあらず甘きことばよ「こほうび」といふは  
 八分のため充電を四時間し片手で撫づるやうに掃除す  
 名簿の名を線で消すときよみがへるほほゑみと声みどりのドレス  
 日脚のび春ちかづくと言ひ合ひてうすくれなるの雲を眺むる

十度余り寒暖差のあるこの頃のついでにはゆけぬ病みいる身なれば  
 温度差の激しき二月の明け暮れに朝と昼間のセーター替える  
 ヒレカツを中心にした恵方巻節分行事も様変わりする  
 恵方巻東北東へ向かいつつ形ばかりを口にせしなり  
 豆まきも廃るるままに賑わいの失われゆく節分の夕  
 眞子様のニュースに心痛めたり民意をしかと確かめられたし

## 菊地栄子

アマリス

・済

「またね」と声を掛ければ幼児は戻りてわが手にハイタッチする朝ドラの続きは如何に幾度も手繰り寄せつつ眠られぬ夜うとうとと風邪に臥している夕つ方あな煩わし腹が空きくる気兼ねなく着服れとなり家籠る裾触れ合えば物落としてつ明け方のドアの開け閉め氣遣えど姆鳥らし一羽飛び立つ入選を喜びくるる仲間たち行く手眩しく風花が散る八重なせる緋の色牙ゆるアマリス遠出して来しまなこに愛でぬ

## 木村文子

二月の光

・羊

冷え切った光をしっかりと抱きしめて降り来る雪は羽毛の軽さ如月のひかりが届く 胸底に魚はまなこをくるりと回す地を這いてタワーマンションを駆けのぼる白い龍なり冬の風は乾きたるうるこ一枚腕につけ沈みゆくなり温みのなかに真夜中を働き続ける人々に守られ眠る冬のさなかを頭にはミルフィーユのような雪乗せて自動販売機は樂しげに立つ幼子の笑える声を聞くとき心地よ春のひかりを浴びるは

## 草刈十郎

枇杷の花

・世

十二月八日知る人いかほどか昭和も遠くなりてゆくなりトランプもゴーンも好まずトーストをかじりつつ新聞目を通しをり来し方の喜怒哀楽を刻みたる顔をさらせる日向ほかなり厳しき冬のりきるために根に命とどめて草は枯れて春待つ青空を舞ふ風花によみがへる空中戦のありしこの空たゆみなく落ちる一滴一滴の水が育てし氷柱の光るわが今年枇杷の花ほど華やきてただひたすらに生きむと思ふ

## 國井節子

茶釜の里

・春

手入れ良き竹の林に冬の陽はゆたけくやさし土の匂ひす田の中に長さ揃へた竹の束を傘状に立て風に曝せるこのあたり茶釜、茶約をこつこつと手作りはげむ里のおだしさ寒干しの茶釜の里のしづけさやたまには一服いただきたくてひつそりとだあれも居ないお茶室で自分流儀の茶会をひらく群れだちてキンクロハジロ旅立ちか円くなつたり潜つてみたり平成の最後の年のめでたさや末の姪御の婚礼ちかづく

## 小泉泰清

銀線を引く

・う

北側に里山荷ひ平地にわが街拓けて日差し抱きぬ白梅の花咲く畑は何時の間に削られ木の間にクルマ入り込むMRIの結果に癌が見つければわれはどうする覚悟を決めん宵からの雨降り出して一夜さの音を聴きつつ夜明け待ち詫ぶぬるまゆの人生終りに近づきて冷水シャワーの虐待おどろく里山よりみさくる果ての太平洋銀線を引き空に輝くしげく走るクルマの音も間違に雪降る朝はなべて黙しぬ

## 河野繁子

里山の今昔

・雁

山城のありたる頃のひと思うその山裾に住みて明け暮る勝成と城主の名をとり冠す山ふもとの田畑に太陽発電城主なる林将監勝就の氏名うけ継ぐ林部落は将監は役職やまほとに屋号とのはらと呼ぶ家の背戸に城主の墓守らるる秋は山冬は平地に降りてくるつぐみの群れの歩む里山山頂にサテライト立ち受信する電波のあやとり見えざればこそ轟音の四機編隊みだれなく岩国基地へ帰りゆく空

小西美智子 早春

ただ一輪枝に残れるくれないの山茶花に今朝は春の雪つむ  
 帰りつくべき部屋に帰れぬ夢を見しあけ方の床ひえびえとして  
 背にぬくきはる日あびつつ摘む草の茎ながくしてやわらかかりき  
 やすやすと土よりはなれ摘まれたるみどりやさしきはこへの色は  
 ハチ公の模様編み込むマフラーをいたく喜び夫は巻きゆく  
 ハチ公の逸話は哀し大戦に銅像までも供出されて  
 二代目のハチ公像を造りたる安藤氏逝く平成の末

小林能子 猪

富士の裾野の巻狩も軍事訓練にて戦略的に討たれたる猪  
 夕焼の富士美しき巻狩の酒宴に炙り焼かるる猪  
 十五夜の奉納相撲 猪が揃ひ踏みして畑を荒らす  
 田畑守る鹿威猪垣狼尿この百年に決まり手はなく  
 猪も鹿も天敵オオカミを失へば種の悲劇のはじまり  
 子を連れて群れなし動くイノシシの道決まりゐて容易き捕縛  
 二黒土星亥年女も七巡目まつすぐ走るほかに能なく

近藤栄昭 尾瀬

前橋で雨に出あえば気のふさぐ鳩待峠へそしてその先  
 草もみじ時雨れる原に一筋の鹿の踏み跡曲線えがく  
 ガイド付き学習登山の中学生池塘の底の赤きはイモリ  
 台風の通りゆきたる尾瀬の空赤く光らず垂れる底雲  
 筋肉痛は乳酸が原因と誰か言う全身に薄めん尾瀬に寝ころび  
 木道の角の安らぎ風弱くりユウキンカ咲く秋なるも春  
 下山して忘れたるを思い出す山岳遭難搬送の項目

近藤芳仙 長崎(一)

如月の長崎にたつ原爆柳あをみたる葉を風になびかす  
 幕末の鳴滝塾は坂の奥いまだに高き水の音する  
 日本を改革したと言ふ龍馬 亀山社中は急坂のうへ  
 カピタンの姿絵の皿カステラの裏のザラメをさがして食ふ  
 紫陽花にすけてしづもる眼鏡橋冬来たりなばランタンを置く  
 出島より入りきたるもの多からむ街にゆきかふ貌をみてる  
 「しばらくは花のうへなる……」芭蕉の句訪へぬみれんが今うかがへる

坂上直美 梅咲ころ

親戚は「大学なんて」と父と吾に面と向かいて針を投げたり  
 「百姓に学問はいらぬまして女子」親戚の言に父は黙せり  
 「勉強が好きなら大学行つたらええ」ありがたきかな父の一言  
 「お前には遣してやれる金はない教育だけはつけさせてやる」  
 学校に行かず覚えた「太平記」「今昔」「平家」父は語った  
 お父ちゃん「何でも知ってる先生」と私言われたあなたのおかげ  
 お父ちゃん梅が咲いたよ道真が好きだったよね東風吹く

坂出裕子 ひざし

何といふわけにあらねど胸底にたえず不安が漂ひてをり  
 老ゆるとはかくなることか身の内にとらへがたなき不安ひそめる  
 山ひとつ越えしこちにささいなる用をしをへてくたびれてをり  
 もてあます暇なきやうに神様が下さる歌集歌書に結社誌  
 音読を聞かせてくれる毎日の孫の電話を楽しみとして  
 用といふものもなければどなつかしき友の電話にこころなくさむ  
 あたたく日差しくればたちまちにこころ明るくかろくなりゆく

佐久間 晟

日乗(二一)

・澗

ものすべて美しく見ゆるこの日頃わが心にも悟りの生れしか  
神も仏も信じることなく生きて来ぬおのれ独りの思いのままに  
あの人もまたこの人もすでに亡しただ茫々のわれの生きには  
この頃は死のみを思うこと多しそは憧れか疲れしゆえの  
空を見よ空を見よとの声聞こゆせんものか今更になお  
あの花もこの花も皆美しきしばし見惚れておらんかこの世に  
死のことを思い続けるこの頃はもっと生きたいことへの思いか

佐藤 道子

車椅子

・甲

細筆をさがして店を移りゆく夫を気づかふ私の夢  
譚妄は夢に似たるや夢の中見知らぬ土地を旅するものを  
「春よ来い早く来い」日向ぼこする車椅子夫のかたへで折るかに歌  
春の歌次々歌ふ日向ぼこ夫の歩ける日を夢みつつ  
今日鴉今日はひよどり春の風冷たけれども光明るし  
照り曇りする日溜りの日向ぼこ居眠る夫に毛布かけやる  
寒き夜半ぬくき布団にくるまるをこの世の幸と思ふ卒寿は

椎名 恒治

夕茜

・橋

雪被く富士の全容浮き出でて輝く茜長く長く残り  
黒き飛騨の西の空より現はれて轟く音のいつこへ航くのか  
南隣並ぶ高層マンションの屋上に舞ふ鳩の群れたり  
グランドを走る学生のことゑは暮れても芝生に走る  
リュック背負ひて絵画教室に出でゆきし妻の今日帰りは遅しと  
わが行くは「敬愛の森」デイサーピス朝十時迎へのバスに  
公園の河津桜見頃なりと人は言へどもわれ頷くのみ

鈴木 結志

天平の宝物(四)

・福

紀貫之朝臣ちゆうしんの書流れよく手鑑として今に息づく  
鴨長明随筆カタカナ交じる書のけやけきまでに味わい深し  
宸翰様書風うるわし後醍醐天皇消息の書を手写し習う  
鳥獸や菩薩に釈迦の見守らるる仏涅槃図ぶつねはんずに死の儀教わる  
筆つかい妙なる後宇多天皇の消息の書目路をみちびく  
全槍一材造り五智如来坐像透彫り秘めてかがやく  
品格がわが目離さじ後光厳天皇宸記書芸美に富む

関根 榮子

音の遊び

・埼

畦道に群れ咲き続く仏の座紫のバステルのひと刷けとして  
こその秋零余子を摘みしはこの辺り鉄路のフェンスの枯れ枯れの莖  
門前に立ち話するしばしの間短き冬の夕映え惜しむ  
沿道を埋める白きビニール傘マラソン選手の肩濡れそぼつ  
プチンプチン弾ける音のなつかしき杉の実鉄砲で昔遊べば  
目弾きも蚊屋吊り草も子供等の植物を使いし昔の遊び  
雨上がり畑より夫のコールあり窓よりわれも虹を見ている

関根 和美

歲月

・埼

命日と思ひ見上ぐる空近くはじめてまみえし日の雨が降る  
豊後なるルイサの鏡にきざまれしアルファとオメガのうつす秘史あり  
黄はみたる棕櫚の葉おさめこの春も灰の水曜つつしみて待つ  
うつ抱えなおも澄みゆく聖歌生む祈り即うたうた即祈り  
三、四月これにて閉ずる平成と予定書きこむこの手も老いぬ  
声つまらせ宜すお姿おどろかず好ましとこそ歳月を経て  
少女期を過こしし町の「遠足」とんぞくが映画「サムライマラソン」となる

## 高尾 恭子

ボンボンシヨコラ

・大

文盲の少女が摘みしや海こえて赤いリボンのボンボンシヨコラ  
貧困の連鎖はるかに一粒のアーモンドチョコかみしめている  
脈絡のなき日は遠し我楽多と母が捨てにしグリコのおまけ  
足し算が引き算になる母の日々ひとすじ庭の白梅かおる  
寒風に外れ馬券が舞いあがる梅田スクランブル日曜の午後  
たわいなき日曜版を携えて茶房の卓にココアを待てり  
名を知らぬ汝の夜更けよ手擦れせし本に煙草の臭いをのこす

## 高津 砂千子

喪章

・風

ただひとりの姉みまかりし年の暮喪章の色の手帖あがなう  
偶然に同じ手帖を求めたる年のありにき姉とわたくし  
時かけて色づきゆけるばらの実のくれない姉は握ることなく  
じんわりと雨あがりの氣のにじみたる夜の舗道に姉の死うべなく  
拾いたる姉のみ骨の太きことウォーキングの度に思うも  
裸木のかなたゆっくうす雲の流れゆくなり過去を乗せつつ  
木枯しの吹くとも胸を張りゆかん支えでありし姉の亡きいま

## 高橋 和代

繋がる

・桃

里の家に隣り合ひたる家を建てなべて良き事となりし  
夫の同意すすみてゐるを大切と 一切迷惑かけぬと決めし  
誕生地に夫の勤務地ありしこと一家それぞれのストーリーとなりし  
山茶花の散華のさまよみかへる静かに逝きし母、亡父の許  
病む母の氣弱くなりしを宥めむと身をさすりをり か細くなりゆく  
隣り合ひ暮ししゆゑに父、母に淋しさ与へず葬りたりし  
母の里の曾孫へわが孫、嫁きたり「縁」とふ大切さ沁みゐるこの頃

## 滝田 靖子

ふう

・新

わが膝につま先立ちをするふうは弟の孫十一ヶ月  
指さしてあーあーと何を教へるやまだ日本語の話せぬふうは  
あぐらかくわが脚の上に足踏みをしてゐるふうそこ痛いんだけど  
ちよつとこ退いてねと母に預ければ泣いて戻つてくるふうやれやれ  
寒いから来なくていいと言つたくせにふうの不在を淋しむ母は  
ふうはもう歩いてるかなふうはもう話してるかなふうで持ち切り  
たちまちにスーパースター一歳のふうに振り回されたいわれら

## 竹下 妙子

春の愁ひ

・霧

春の水みなぎり流る里川に鮎は春こそ生まむとするか  
文旦は友より届きびかびかの黄のやさしさは花のごときを  
いさぎよき声に啼きたる寒鴉韓国岳をさして翔びゆく  
山頂のあたりと君が指す鳥は春の光の中にかがやく  
ふり仰ぐ山はゆたかな貌もちて心むなしき吾に迫り来  
暮れてゆく陽の静かなるくれなるを亡夫とも思ひ吾とも思ふ  
秘めもてることさへややに失せゆかむ吾が野晒しの心さびしむ

## 田土 成彦

豆炭

・宙

田土くん田土君炭団くん昭和中期のわれのあだ名のひとつ  
たどさんとアナウンズありわがごとと思ひ返事す中途半端に  
それぞれの長さを保ち三十年抽斗にある鉛筆四本  
若さとはさういふものか鉛筆の芯そんなにも尖らせてゐて  
足裏をふくらはぎに当て温め居り孤独染しむ思ひにもにて  
ほこほこと足温ければ豆炭を入れたアンカは冬の染しみ  
七輪の豆炭の熾り確かめて宝のごとく灰に埋め込む

田土才惠

淡路島・沼島

・宙

中島央子

花摘み

・森

おのころ鳥響きやさしき名を持てる沼島は霞む海峡隔て渡り来る海峡の風に行めば神話の世界のただなかにいる速霞む沼島に暮らす人のため船賃二百十円なりと

水仙の花のなだりを風吹けば空へそらへと香を押し上ぐる

浄瑠璃の頭作ると意気込める中学生の制服すがた

聞こえるようなお登勢の声までも頭たせて舞台しんと鎮まる

阿波人の人形浄瑠璃継ぎてゆく気配びんびん館に潜む

玉井綾子

人事異動

・羊

中島義雄

啓蟄

・岡

経営層の人事異動を開示後の社内あちこち醒めた耳打ち

内示の頃 見慣れぬ着信番号に臍腑の奥で鳴るドラムロール

勤務地の変わる内示を受けた日の帰路の車中の時間の長さ

寝付けずに早く目覚むる 二つ折り 内示場所の地図 副店長の手

内示受け初めて入る事務所内 知った顔あり荷物を下ろす

異動知り二日目の夜はすぐ寝入るギリギリに起きる もう夢でなし

後任は来ず一人での担当となる同僚に引き継ぐものなし

虎谷信子

雛

・伴

永塚節子

序奏

・銀

京の巧の手になるといふ 五段雛。われの齡と 共に来し方

今年も亦 雛かされず淋しきよ。倉に置かれしままなるを、詫ぶ

杓き日はヒナ祭るとて 遊びけり。白酒・菱餅・干菓子子のふるまひ

せめてもと、雛掛軸かかけむか。桃の切花 いけそへられて

仏光寺に、古き雛を拝観せし すきし日のあり。友は院主と

鹿児島先生の 作なる紙塑の人形を、師は大切に 飾り居ましき

文藝春秋 ぶ厚きを手に気ほひたり。芥川賞作品読まむも 難渋

春寒のひと日便乗の身をはこぶ房州千倉の花畑まで

中東の石油もやさず露地に咲くストック・ポビーの恵みなるいろ

二月の風のなきたるストック畑八色の畝間をゆき戻りする

執すること淡きとおもふ身に摘むはストックの紅澱ゆきむらさき

育ちたる時間を抱き金盞花摘まるるまでをけんめいに照る

金盞花・ストック咲かせる岬の先に鯨の道を知る人ぞ知る

征きし子を待ちしもありなむ岬回にいくさ無き世の平成畢んぬ

三分粥全粥今日は普通食窓に春めく鳥のこゑして

風癒えて下萌踏めば初蝶が音あるごとく空に翔ちゆく

冬タイヤ換へるらしき隣り家の声透りくる啓蟄の朝

恋ほしげに蜜蜂止まる蒲公英はまだ閉ちてゐる啓蟄寒し

微けくも初音聞きたる思ひして外の面に立ちぬ今日は「耳の日」

受験期の孫の部屋より唐突にジャズが響けり春寒の午後

葬式のための間取りを持ちてゐるわが家ぞ襖の山水も古る

枝枝をばっさり切られプラタナスは聞せまるなか死者のごと立つ

満開の河津桜の花影に見えかくれするは何鳥ならん

電線にむくどり三羽すすめ二羽交互に並び世は事もなし

白梅の名は「月影」と古木なる枝にほつほつ花は二分咲き

キッチンにふきのとうの香満ちみちて夕餉の菜のひとつ完成

炊きたての飯にのせるひと箸のふきみその味春を呼び奇す

細き枝に白木蓮のつぼみ一つ一つふ毛に包まれ春への序奏

萩 葉子 菜の花 ・ 銀

緑道のせせらぎに鷺今日もきて啄みている弥生一日  
菜の花が一面に咲くカレンター三月嬉しいことがありそう  
雨の日の小さな木の橋わたるとき息整える歩みゆるめて  
四、五本にそろいし土筆登園の園児そっくり摘みてゆきたり  
蹠がズキズキ疼く雨模様ウォーキングの約束またもキャンセル  
私は今忙しいの目玉焼三つ一度に焼いて息づく  
時間、時間 時間と思つて鉛筆を走らす一首詠みあげるため

白子 れい 如來さま ・ 洛

〈心光院〉その名もかがやく大寺の茶会に招かる ころろうきうき  
招かれしは床しき名もつ 〈心光院〉歌友の護らすみ寺なりとぞ  
大炉の炭火あかあか燃えて冷えきりし身体もころも温めくるる  
大宗匠のお軸の呼びかけ広がりにて薄茶の席のあかるく和む  
薄明の部屋に佇ちます阿弥陀さま自ずとぬかずく御前にありて  
ほよほよと笑みうかべらるる如來さま心に重きもの抱く吾に  
本堂に笑みていませし如來さまの優しきお顔帰りて今も

ばばりょうこ ふしき ・ 鹿

大寒の朝あしたの空に残りたる月さええざえと満ちてかかれり  
帰り道に蝶がまといつき玄関まで送りとどけて去りゆくふしき  
誰が化身なるやと汝をいふかしみ心ゆらきて涙さしくむ  
三ヶ国の言葉でデパートのアナウンス流れるように 又は 訥々  
回送のバス「ごめんね」と通りすぎバス停の人らの苦笑をさそいぬ  
病む身とは申せ日がなひとひと寝ていたる時間泥棒の感ひとしおの  
如月は青き衣きぬをひるがえし早や去りゆきぬこの月の慣い

浜谷 久子 煮こり ・ 地

おはようと声掛け合つて明ける家ひと言ふた言遺影も交じり  
くるまれる夜具のぬくもりはるかなる記憶かまだ見ぬ未来世の夢  
煮こりのとろり甘辛立春の寒さの中のおやうさ確かさ  
沢庵のまだ塩辛く溶けぬ糠もどす重しのきしぎしくしゃく  
牡蠣を焼く炭よく燃えて三分間返す牡蠣殻ははけて隣席  
いち日を無言に閉じゆく夕暮れの安けさ誰を咎めることなく  
家ぬちに籠もる時間のただ過ぎて石のようにも花のようにも

浜本 芙美 想定外 ・ 夢

意のままにならぬと駄々をこねる子は想定外のことと為すなり  
前歯ぬけし口許ににこつと笑うその様まさに好好爺なり  
浮雲に届けとばかり夏蟬の雄叫び消えて秋ふかみゆく  
植木鉢の土に静かにいのち終う蟬のむくろの羽根光りつつ  
体調のままならぬ日は心静かに『葉っぱのフレディ』を読み返すなり  
生きものの肋骨のごとき雲にむき双手をあげて何を叫ばん  
かそかなるいのち一茎のホトトギス家庭に見たり力をもらう

檜垣 美保子 音 ・ 昴

西向きの床屋に鉢植えひとつあり金柑の実のともる夕ぐれ  
山ぎわの路肩に小振りのきんの鈴砂磔のうえにすこしうもれて  
黄のマカロンひとつ手にのせレジ前の列につらなる青年ひとり  
ほおずきの朱のはじけたることとき空背を染めてくれ東へあるく  
迷いなき二すじの音夜の音一階のはがカーテンを引く  
街の灯のとどかぬ川のなかほどに粘度濃き闇よこたわりたり  
六十年前の河口に祖父釣りしきらめくさより春のまぼろし

福田陽子

弓取り童子

・今

船田清子

絶景紀行

・天

雪道を峠めざせり細枝をも紅をうかせて水木照り映ゆ  
 会津より流れくる雲追ひゆけば雪をひろげる速き山脈  
 拜殿にいたる石の道ためらひて一步が進めぬ一歳の女兒  
 鬼の字を逆さに吊す的めかけ童子射る矢を息つめて待つ  
 小さなる白足袋が呀ゆ境内に矢を持つ兄弟神妙にして  
 嬉しさを杉の巨木の元に寄せ兄弟の矢を見守る祖父は  
 つぎつきと放ちゆく矢に息止むる村人ひとつとなる刹那あり

藤田美智子

横顔

・新

あきらめをさらりと語りゐるを聞く横顔のみが見える席より  
 就学前に避難せし子らのふるさとと綿雲のうへにぽかんと浮かぶ  
 怒つてもいいはずなのに笑みてゐる歳月は怒りのかたちを交へる  
 〈福島を元気にしたい〉といふフレーズが汚染された土を黙らす  
 口開けぬまま萎みたる柘榴の実揺れる枝にぶら下がりをり  
 山の端より昇る朝日を見る地球の自転の速き朝よ  
 手袋ははずすにすみたる冬が過ぐ厳しく自らを問ふこともなく

藤森巳行

孫娘八歳

・銀

今だから話せる事も今もまだ話せない事も数多くある  
 人間の尊厳さへも失へり原発事故の被害者語る  
 時経ても解決しないとふ被災者の生命の叫びに幸福祈るのみ  
 震災の九日前に生まれたる我が孫娘八歳となる  
 人混みを縫つてイオンの玩具売場孫は我が手を引きて連れ来る  
 六千円少し高いが消防車欲しがる孫に財布のひも緩む  
 三月になつてもマスクの人減らぬインフル終息花粉が飛散

能はざる旅への想ひにBSの二時間に見入る「絶景紀行」  
 谷川岳新緑の裾野に群れ咲けるしらねあふひの紫の風  
 山頂へ切り立つ巖壁のま下にし黄金まばゆき草もみち原  
 「東北の四季」なる映像 あゝ奥入瀬・こは弘前城・松木内川？  
 二人して桜の下にて食べたる「ゆべし」今なほ甘し 味蕾に  
 薬師寺の東塔の水煙復元なり白鳳の色よみがへるらし  
 この秋は大和の空へりやうりやうと飛天の笛の音色流れむ

久我田鶴子

お茶の時間

・羊

三月を雨に迎ふる音たてて降りくるものに頭より打たれむ  
 手折りこし生家の椿ひとつかね開きて花の重さ増せるは  
 根まで匂ふ小賀玉の木なり植ゑ替への手は休めずに枝を見、根を見  
 十二階ペランダの鉢に冬を越すむつちり白き幼虫がある  
 葉の裏の金のつぶつぶその親の（たぶんさうだらう）と派手な黄色  
 べにふうきの茶葉のひらくを待ちながら産地対馬から大西巨人へ  
 ウンカが噛んだ茶葉の甘さを教へつつ蜜香紅茶こころにも効く





## 香川進の生きものの歌 7 田土 成彦

・煙突を這ひのぼる毛蟲はふと飛びおりてやらうか  
 などと思ひぬ  
 『氷原』より

かたつむりなどもよく木の幹を這い登っているのを見かけることがある。多くは頭部を上に向けているが、このような性質は動物の本能とか反射と呼ばれる生まれつき備わっている行動のひとつで、走性という。この場合、重力方向とは逆に行動するので負の走地性と呼んでいる。この毛虫にとってはその走性に従っただけの行動であらうが、観察者にとってはその意義は計りがたい。その突端まで登ったとしても食料となる葉っぱがあるわけでもなく蛹化に格好の葉陰があるわけでもない。

ここから作者の心理面に分け入って見ようかと思う。作者と毛虫との関係は、相似形として例えば神と作者との位置関係に置き換えることが出来るだろう。ただ、毛虫は飛び降りてやろうとは思わないけれど、作者は飛び降りてやろうかと思つたのがこの歌の面白さだ。幾度かの挫折を体験して、この飛び降りてやろうかと思つた心理状態がこんな単純な構図の歌の中に詠み込まれているのも、あらためてこの歌に対面した筆者の発見でもあった。香川進の容貌の中にこんな人間的な弱さも内包していたのかと思つた。一人の人間の持つ魅力として弱さを内包した強さをこの歌に感じ取るのは行きすぎた鑑賞かも知れないが、破調と相まってその世界に引き込まれてしまった。

現代歌人協会主催 朝日新聞社後援

## 第48回 全国短歌大会

開催日時 二〇一九年十月二十七日(日)

会場 学士会館 東京都千代田区神田錦町三二二十八

選者 磯田ひさ子・内山晶太・大島史洋

沢口芙美・島田修三・高木佳子・林田恒浩

日高義子・松平盟子・吉川宏志

賞 全国短歌大会賞・朝日新聞社賞

学生短歌賞・選者賞

入選発表・入選歌批評・授賞式

特別選評 日高義子×吉川宏志

※入賞作品は朝日新聞・短歌雑誌にも掲載されます！

## ◆ 作品応募要領 ◆

◆ 作品 新作五首以内(何組でも可 未発表作品に限る)

参加料 一組 三千元 (学生は二千元)

送り方 ※学生は小学校から大学(専門学校を含む)まで。  
 B4判の用紙(四百字詰原稿用紙も)に作品を書き、右の欄外に郵便番号・住所・氏名・年齢(学生は学校名)・電話番号を明記。

応募料は、現金書留または郵便為替を同封。もしくは郵便振替により送金(振替口座 00190-2-10916 必ず受領証の写しを同封してください。)(郵便切手は不可とします。

送り先 〒106-0003 豊島区駒込一三三十五―四一五〇二

現代歌人協会 全国短歌大会事務局あて

締切 二〇一九年六月二十日 当日消印有効

## 今日の二人

### 吟行会追想

村石けさ子

はじめての歌会は日光の綿萱をうたいしことなど思いておりぬ  
 それぞれに余技のある歌友懐かしくたどりし歌会の思い新たなり  
 来し方の四十代より導かれ短歌詠む今の糧となりたる  
 親しみし歌友の幾人鬼籍に入り過ぎゆきし年も胸に温し  
 諸諸のセンス乏しきわれなるにひとつといえどうた詠みて来しも  
 下野のさくら咲き満つ公園に吟行会を樂しみしわれら  
 山桜のわすれ難しも嵐山のしんりん公園の吟行会に  
 青苔のひかり妖しき百穴をめぐりき春の野を踏みしめて  
 (百穴…吉見百穴)  
 修復し彩色も濃き国宝の聖天山のまなうらに顕つ  
 新年の歌会のはてちぐはぐなうたに笑えり過ぎし日のこと  
 信濃の国県歌の軸を送り来し母の思いの今にして深し  
 うっすらと降り積みし雪の朝にはふるさとの空気の匂いするも  
 大君の来たるべき世の元号をひそかにわれも想いてもみる

### 縁に導かれ

私のふるさとは長野県北部ですが夫の転勤、転居を経て気候のゆるやかな埼玉で過ごしてまいりました。その頃私は仕事の関係で医院で看護師をしていた古武治子さんに出会い誘われて関根榮子先生が主宰しておられるしらおか短歌会に入れて頂きました。更に地中海へと繋がる第一歩でした。毎月の歌会ではわが身の不勉強を恥じながら、短歌の表し方、短歌のころといつたものを先生から諭して頂いたのです。一年毎にその地の春に会う吟行会は、その一駒一駒も楽しい思い出です。皆それぞれにめぐりをとりまく縁はいく通りもあるうかと思えますが、歌を傍の生活も頂いた縁のひとつと思っております。流されそうになる時、怠惰になる時短歌はひっそりと私の傍にあるような気がします。折にふれて好きな歌人のうたを口遊むこともあります。人間の老いは精神から始まると詠んだ詩人もありますが、さりとて無理がきかない現在の自分も受けいれながら短歌をつくる生活を続けられたらと思っております。そしてめぐり来る日日のなかで、スポンジのようなところで歌にも向かえたらいいなとも思っています。

## 今月の二人

### ひとり暮し

### 村上かず子

つぎつぎと帰って行きし正月の温もりさめて寒椿咲く  
 毎日を新たな気持で生きたしと四角く丸く居間の窓ふく  
 今は亡き夫の分のコーヒーも入れるメジロのつがい見る朝  
 新緑の山の裾まで空青し胡瓜の支柱深く打ち込む  
 つらい事嫌な事など思うまい夏野菜の苗今日買いに行く  
 一輪車にじゃがいも運ぶ道すがら玉葱五個と交換したり  
 亡き夫にバレンタインのチョコレート供うる今宵星の煌めく  
 母の日に絵手紙セットとメッセージ「無理せず元気で野菜送ってね」  
 雨の日はひねもすこもり三日分の新聞隅ずみまで読みふける  
 余生という寂しき言葉口にせずまだこれからと絵手紙習う  
 古稀過ぎてメールを孫に教わりし独り居のわれ夜なが楽しむ  
 皮を剥く他に音なし冬の夜信州りんごの香り漂う  
 この年も独りの生活たつき南瓜炊き柚子湯に浸る温かき夜

### 感謝の日々

私の故郷は、伊吹山の麓の浅井町です。  
 十六キロの道程を高校へ通学して居りました。冬は積雪多く、父の叔母の宅で泊めて貰って居りました。叔母は体が弱く、私に早くお嫁に来て欲しいとの事で、卒業後直ぐ結婚しました。私は慣れない家事をこなす乍ら、編物、公民館の書道、文芸講座等に行って居りました。姑は寝たり起きたりの生活でしたが、老衰にて九十二歳で亡くなられました。主人は定年まで元気で銀行に勤めさせていただき、退職後も近くの会社、七十四歳までお世話になりました。これからは旅行等と話し合っている矢先に、脳腫瘍が見つかり、半年余りの闘病生活で、呆気なく逝ってしまいました。「これから、どうしよう」と途方に暮れて居りました処、中川富美子先生よりお誘いを受け、湖北短歌研修会に入らせていただきました。木村光子先生、吉内尚彦先生の優しく丁寧なご指導を受け、地中海にも入会させていただきました。文法、表現の仕方等は余り気にせず、短歌を生活の糧として自然や皆様との出会いを大切に、感謝の日々を送ってゆきたいと思つて居ります。

## ◆今月の二人・村石けさ子作品評◆

## 百穴をめぐりき春の

村石さんは埼玉県の杉戸町在住。ふるさととは長野県の北部だという。短歌との縁を詠っている。

・来し方の四十代より導かれ短歌詠む今の糧となりたる

四十代から短歌を始めたという。そして今、村石さんにとつて短歌を詠むことが生きる糧にもなっていること。そこには人との縁もあったわけだが、「短歌のチカラ」を思わずにはいられない。

・山桜のわずれ難しも嵐山のしんりん公園の吟行会に

歌会の他にも、吟行会に行った思い出がたくさんあるようだ。日常を離れた、歌の師や友との小さな旅はどんなに楽しかったことか。中でも、嵐山のしんりん公園の山桜は忘れ難いという。

「嵐山」は「らんざん」。京都の「あらしやま」ではない。

・青苔のひかり妖しき百穴をめぐりき春の野を踏みしめて

こちらは、地元埼玉の吉見百穴を訪れたときの思い出。百穴のひとつひとつを覗き込んで青苔のひかりに心を震わせたのだろう。「ひかり妖しき」や、下の句の「めぐりき春の野を踏みしめて」のリズムと明るさに、心の弾みが伝わってくる。

・うつつらと降り積みし雪の朝にはふるさとの空気の匂いするも

「朝には」は「あしたには」と読む。二句目、八音。四句目、九音。結句、六音。字余り、字足らずがあるが、言葉の流れにあまり無理がない。埼玉では珍しい雪の朝に、雪深いふるさとと重なるものを嗅覚で感じ取っているところが素晴らしい。結句は、「匂いするも」と七音で収めた方がいいかも。

## ◆今月の二人・村上かず子作品評◆

## じゃがいも運ぶ道すがら

評者・久我田鶴子

村上さんは、琵琶湖のほとりの長浜市在住。ふるさととは、そこからほど近い伊吹山の麓の浅井町だそう。

・毎日新たな気持で生きたしと四角く丸く居間の窓ふく

夫を亡くし、現在は一人暮らしのようだが、毎日を新たな気持ちで生きたいという姿勢で生きておられる。居間の窓ふくというのは、その気持ちの現れ。「四角く丸く」というところに、柔らかな心のあり方が見えるようだ。

・新緑の山の裾まで空青し胡瓜の支柱深く打ち込む

初夏の農作業。山の新緑と空の青が、季節とすっきりとした天気を表している。「山の裾まで」と表現していることにも注目された。下の句は、具体的に力強い。ここにもまた生きる姿勢が感じられる。

・一輪車にじゃがいも運ぶ道すがら玉葱五個と交換したり

じゃがいもを収穫し、一輪車で運ぶ。その道すがら早くもじゃがいものいくつかは玉葱五個と交換される。この、人と人との繋がり方がなんとも嬉しい。人の姿が直接には描かれていないにもかかわらず、ちゃんとそれが解り、温かいものまで感じられるのが不思議だ。数詞もしっかり生きている。

・皮を剥く他に音なし冬の夜信州りんごの香り漂う

一人の夜の静けさ。冬の夜の冷え。それだけ見れば寂しい感じもするが、ここでの信州りんごの存在感は大きい。林檎の皮を剥く静かな音と、部屋に漂う香りは、聴覚と嗅覚を満たすだけでなく、視覚も触覚も満たし、信州までも引き寄せ、一人の冬の夜が閉ざされたものではないことを知らせてくれる。

私と短歌の出会い。今思えば奇しきお引き合わせ魔法の糸で導いていただいたとよりほか思えぬ偶然の重なりでした。

五年間程の夫の看病で疲れ切っていた私はもう人生の終りの様だったそうです。夫の死後、夫の主治医から「お母さんが先かと思っていたのに勝ちましたね、これからお母さんの治療にかかります」と毎日点滴に通ううち「体を動かすことと脳を使う事を両輪とする生活をして下さい」と。さて何をすればいいのだろう、ほおっと生きて来た私に突然そう言われても見当もつかず、とにかく脳を使う事は友のやっている習字へ、体の方は歩く事としました。

その後、日帰りツアーで初めて会った方から気功教室に空席が出来たので来ませんかとお誘いだき気功を始めました。たまたま気功も短歌も同じ施設の教室をお借りしており、年一回の施設の行事の体験学習の短歌教室へ気功の友が申し込んで下さっていました。当日の朝、その友から「急用が出来て行けなくなっただけで一人で行ってね」と電話が。とほとほと独りで行くところの所で出会った方も初めて短歌のお話を聞きに来られたらしいので、勇気百倍並んで座りました。山村金三郎先生のお話から白く、魅了されました。すると隣の方から

「こないだ先生の教室いっしょに入れて頂きました」と誘われ「だめです」とお断りしましたが、再三のお誘いにもまあいかに何事もやってみんとわかれてからぬかねと頷き、平成八年二月から入れていただきご指導を仰ぐことになりました。

さあそれからが大変だった。今まで短歌の「た」の字もなく、習おうと思ってもせず、ましてや「短歌とは何ぞや」と考えたこと



もなき門外漢で、今回も一寸お話を聞きに行くくらいに軽い気持がこんなことになってしまったと思っても後の祭りでした。こんな私を先生は手を取り足を導いて下さいました。

少し経った頃、自分の歌が短歌になっているのだろうか？ 見込みがないのなら早

くやめた方がいいかなと思ひ、山村先生にお伺いしました。「うんなんてで」と。ああよかった。それなら少し続けてみようかと。もう駄目だと思つた時もありました。

今は亡き先輩から「やめたらあかんえ、五七五七七にして出したらいいのやから、継続は力」と勇気を頂き、しばらくするとその闇からも抜け出しておりました。

山村先生が急逝され、あと白子れい先生のご指導を受けることとなりました。先生のおあたかく適切なご指導を頂き今日まで来られた事に感謝するばかりです。

思えば短歌への道を開いて下さったのは気功の友、偶然会場で知り合った方のお誘いで短歌への扉がぱっと開かれました。体調をくずし習い事も皆やめてしまったのに短歌だけは続けてこられたのは、ひとえに山村先生・白子先生に引張っていたのだとお陰と感謝いたしております。その上、地中海にも入れていただき、誌友の方々との交流もあり、晩学の私にも歌を詠む幸せな日々が巡って来てくれました。

これからは、白子先生を目標に頑張っていこうと思っています。

・近付こうと思えど近づきがたき距離どう  
・どん進む師の後追わん

ふり返る機会を有難うございました。